

第一回 国語科問題文

二〇一六

〔一〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

高校一年生の白石桃子は短歌を詠む「うた部」に入部します。うた部には顧問の難波江先生、三年で部長のいと先輩、二年の清らさんと業平先輩がいます。

全員が揃うと、先生が前に立ち、私が正式に入部したと告げた。

「せっかく一年生が入ったので、もう一度、短歌を作る上で大事なことを、確認しておきたい。歌に詠む素材は、自分から求めていかなければならない。日々の生活の中で感じる喜怒哀楽の、その瞬間そのままを切り取る。そこに言葉の命がある。その命に、どれだけ葉を繁らせ

どういう花を咲かせるか、それはみんなが種である心をどう育てるにかかってくる。何か質問はあるかな」

「今、その瞬間そのままを切り取るって言いましたが、あとで直すのはいいのですか。この前、清らさんの歌を、いと先輩が直したりして

しましたけど」

「いい」先生はあっさり答えた。

「理由はふたつある。ひとつは、日常の生活の中で、心が揺れた瞬間を切り取るといっても、誰かに届かないという意味がない。届くってことは、共鳴、共感しあうってことだな。そこで初めて歌として成立する。でなきゃ、独り言だ。どうすれば、伝えたいことを効果的に伝えられるかを考える」

「もうひとつの理由というのはなんですか？」いと先輩が聞く。

「それはせっかく、こういう場があるのだから、みんなで活かそうよって話。詠み合うだけじゃつまらない。自分の何をどうアピールすれば、相手の心を揺さぶることができかを考えるってこと」そして先生は私をまっすぐに見て言った。

「短歌には心の瞬発力と柔軟性、そのどちらも必要だからな」

ハイと答えるべきなのだろうけど、つまってしまった。そのどちらも自分には欠けている気がしたから。

いったいなんのために、あれほど気を遣いながら毎日のを送ったのだろうか。結局私は友達一人守れなかった。

「ほら、またぼーっと歩いている。転んでも知らんで」

清らさんの声でわれに……。どうしよう。綾美のことを誰かに話したい。最初はなんとか元気づけてあげたいと思ってたけど、正直心の隅で、重荷に感じている自分がいる。

「同じクラスに橋爪綾美という子がいます。その子と私は小学校からの同級生なんですけど、あまり学校へは来てないんです。綾美がちゃんと学校へ来るまで、私は友達を作らないって決めたんです」

「はあ？ 何それ、しょうもない……。そうや、ほな、こうしたら」励ますように優しく私のひざを叩いた。

「その子も誘ってみるねん。その子もうた部へ入ったらいいやん。家から出てくるのをじっと待ってても、難しいのと違うかな」綾美の顔を思い浮かべる。短歌と一緒に作る。確かに国語は、綾美の好きな教科だ。綾美に何か働きかけるべきなのだろう。

「桃子、どこ行くの？」日曜の朝、出かけようと靴を履いていたら、お母さんに止められた。

「部活。うた部に入ったって、言ったでしょ。今日はみんなで、歌の素材になるものを集めにショッピングモールへ行くの」

「そうだっけ。ならいいけど」そして、一度戻りかけ、振り返るとまたやってきた。靴を履き終えた私を、思案に……。目で見る。

「また今日も、あの子のところへ行くのかなと思ったのよ。もう中学は卒業したんだし、あの子のことは忘れて、高校生活に集中しなきゃ。桃子だって、するだけのことはしてあげたんだから」

今日、綾美は来るだろうか。この前うた部のことを打ち明け、その話をしたときには、とても嬉しそうだった。ほんの一瞬だったけど、昔と同じ目の輝きを見せた。でも、「疲れてるから無理かも」って言ってた。「そうなんだ。無理しなくていいよ」って答えた。でも本当は私の方がよほど声に出して言いたかった。「B」って。ふと、このまま消えちゃいたいと思った。家のことも綾美のことも、全部自分から切り離して。一番切り捨てたいのは自分自身なのかもしれない。何ひとつ自分の意思で前に進めない自分……。それにしてもお母さんが、あんなふうに綾美のことを思っているなんて。

みんな、何売り場に注目して、どんな短歌を作ったのかとても気になる。

「さあ、誰から発表するかな？」清らさんの手があがった。

「えー、みなさんの期待に応えまして、私はずっと、食料品コーナーにおりました。とにかく、肉も野菜も高くて、うちのお母ちゃんが嘆くのもわかります」

「だまされるそしてやっぱりだまされた新発売と期間限定」

二回ずつ読む。一回目はメモが取れるように少しゆっくり。二回目は自分のリズムで読む。

「そうだな。じゃあ、白石に感想を聞いてみようか。どうだ、白石」

「えっ……」いきなり指名されて驚いた。言葉を扱(あつか)うた部だけに、わかりませんは、許されない。

「はい。あの、すごく気持ちがわかります。ときどきアタリがあるから、つい買っちゃいます。だまされたくて買ってるのかもしれない」

「なるほど。それはおもしろい心理だな。じゃ白石、このへんで行っとくか」

「あ、はい」

『いつまでも三歳の目の無邪気さでむきあえなくて母も私も』

「これは、たまたまおもちゃ売り場で見た女の子と、自分が重なったんです。その子は、お母さんに、欲しいおもちゃを買ってもらって、ニコニコしてました。じつは私、今朝お母さんとちよつとあつて……。成長するって、ある意味残酷(こくどく)だなんて。でもそれはお互いさまなのかも。いくつかの気持ちが重なり合ってきた歌です。だから純粹には、今作った歌ではないです」

「純粹に、今だけを生きてる人間なんて、どこにもいないさ」業平先輩の言葉は、よく研いだ薄刃(うすば)包丁で切った野菜のようだ。

「それこそ本当の気づきだと、僕は思うよ」やわらかく言い足す。

「今の歌は、大事にしるよ、白石。ひとつの歌にこだわるのも大事だし、手当たり次第に書いている中で、ふっと自分の心の芯(しん)に触れる歌が生まれることもあるから。でも自分では、よくわかってないだろ」

「あ、はい」

「だからこうやって、感想を言い合うのも大事なんだな。」

何か不思議な感じがした。短歌(たんか)つて心の格闘技(かくとうぎ)なのかもしれない。綾美も今日来ればよかったのにと、やはり考えてしまった。ちゃんとした人と人とが生の言葉でつながっている世界があるって知ってほしい。

図書室への帰り、ふと見ると部屋の電灯が点いているのがわかった。ドアを開けて中へ入ると、いと先輩が本棚(だん)の前の椅子に座(すわ)って、文庫本を読んでいた。ドアを閉めて、いと先輩の正面に腰を下ろす。

「先輩、私って短歌、うまくなりますかね。ぜんぜん才能がないような気がします」

「うまくななくてもいいんじゃない」

「えっ、なんですかそれ？」アドバイスでももらえるかと思って言ってみたのに、ちよつと心外だ。いと先輩から見れば私の歌なんて、うまいへた以前の問題なのかも。

「桃子は、在原業平(あわらのなりひら)って知ってる？」

「在原業平ですか……？」

「そう。たとえば、『ちはやぶる神代(かみよ)もきかず竜田川(たつたがわ)からくれなゐに水くくるとは』」

「あ、たしか中学のとき百人一首で習いました」

「それでね、在原業平が言うには、本来歌というのは感情が溢(あふ)れて、どうしようもなく歌になるものなんだ。優れた歌にはならなくても、それが歌ってもんなんだよ。そう言ってるの。だから自信を持って自分の気持ちをぶちまければいいんだよ。(あ)詠(うた)いきろうと思わなくていい。桃子の場合、まだ感情が溢れるところまでいってないのかもしれない。もしかして自分で抑(おさ)えてるのかも」

でも、そうは言っても先輩の歌はうまい。

日曜日、今日は綾美を誘って、清らさん家のたこ焼き屋「たこどつぽ」へ行くのだ。

「おはよう、綾美」

家の中ではまるで綾美の暮らしぶりに合わせたかのように静まって、二階へあがる階段の音だけが小さく鳴いた。綾美を見ていて思った。ほんと、存在感が薄くなるやりきれなさ、誰ともつなげない虚(むな)しさ、孤独(こどく)を深めていって、ついには透明な存在になっちゃうのさ。

F 私はどうしてもここから綾美を連れ出したかった。そしてそれができるのは私しかない。

G 「一人で行って。私、今日は無理みたい。なんか気持ちが重くて。うまく桃子たちに合わせられそうにないから」
「今までなら」「うん、わかった」と綾美の言葉に従っていた。でも今日は違う。

「帰らないよ。綾美の気持ちが動くまで待つよ」

「一人で行けばいいじゃない」

「私は一緒に行きたいの」

「どうせ私なんか行っても、変な目で見られるだけだよ。うまくも話せないし」

「そんなことないって。そのままの綾美でいいんだから」

綾美は何を見ているのか部屋の隅を凝視(ぎやうし)して見ると、どうすればいい？ そうだ……。振り返って窓を見た。赤や緑の小花を散らしたクリーム色の厚いカーテンと窓と雨戸が、外の世界の光や熱や色や、そして時間までも遮(さか)っている。

「ここ開けるから」少し乱暴かもしれないと思いつつ、ザッとカーテンをひとまとめにくくり、窓を開け、ガガッと雨戸を引いた。新鮮な空気と光が綾美の部屋を満たす。綾美が怒(おこ)りだしたらどうしようかと恐(おそ)れたけど、それはなかった。座ったままボカンと私を見ていた。綾美の表情(へいしやう)がふっと(い)なった。そして綾美は立ちあがった。

たこつばの看板に、綾美は大ウケした。清らさんと二人で、学校生活の楽しいことをピックアップして話した。

「そういえば、この前うた部のみんなが作った歌、読んでくれた？ よかったら感想聞かせて」

清らさんがプレッシャーをかけないように、さりげなく言う。私は緊張した。私も知りたい。

「私なんか言ってる、いいんですか」

「えっ？ ゆーてゆーて。なんぼでもゆーて。気に入った歌とかあった？」

「あのう……。男の人の作品、よかったです。『空は空海には海の青がある僕の想いに色をつけるな』とても清涼感^{りやうかん}があつて、それでいて力強く」

「おっ、なかなか見る目があるやないの。けどな、初めの頃は業平も、暗い歌ばかり詠んでたんやで」

清らさんはスマホを取り出すと、そうさをくり返し、「ほら」と私たちの前に差し出した。

『水面を叩けば上がる水しぶき』^① という名の水しぶき

「確かに……。業平先輩に何かあったんですか？」

「去年の夏休みな、バイク乗ってて転んだんや。それで肩^{かた}を骨折して、今は週三回泳ぐのが限界みたい。高校入学当時は、インターハイ出場も夢ではなかったのに」

それで水泳部に週三日行つて、月曜と木曜は、うた部に顔を出してるんだ。どうしてかなと思つてはいたけど、聞けなかった。

「ほんま、もう水泳やめればいいねんけど、三年間は泳ぎきるねんて。それが、自分なりのこだわりみたい」

店も混んできた。私と綾美は、そろそろ帰りますと席を立った。綾美がひとこと「いい店だね」、そう言つて見せた笑顔だけを、私は大事に持ち帰ることにした。

連休明けの部活で先生はホワイトボードに「六月十四日(日)・同月二十一日(日) 短歌甲子園県予選」と書いた。

「いきなり言っておくけど、うちは四人だから出場できるかどうかは、ちょっとわかんない。予選は県独自のルールで、五人参加するよう、申し合わせている」

「絶対に五人必要なんですか？」業平先輩が確認する。先生は一瞬、うーんと天井^{てんじやう}を仰ぎ見る。

「ただお願いしてみるから、万が一出場できるかもということ踏^ふまえ、この両日を頭に入れといて」

「先生、誰か引つ張つてきてくださいよ。一人くらいいるでしょ。② とうろく^{とうろく}だけして、その日だけ来てもらえばいいんだから」

「おるやん、もう一人部員が。ほら桃子。橋爪綾美がおるやん。これで五人揃うな。ねっ、部長、綾美ならいいんでしょ」

清らさんの中で、スイッチが入ったようだ。

「いいけど、期待できないし。彼女にそういうプレッシャーをかけるのって、どうなのかな。大会当日になって、今日は外出する気分じゃないとか言われたらどうするの」

いと先輩の意見はしごくまっとうだ。最終的に綾美をあてにすべきか、結論は出なかった。

「せや。日曜日、業平の試合が終わったあと、うちで、お疲れさん会しようや。そのとき、綾美ちゃんを呼び出して、みんなに会わせるのはどう？」

いきなり学校でみんなと会うより、リラックスできるし、つながってる感を作る」

清らさんはすぐそうやって簡単に言う。私は相づちすら打てなかった。

日曜の朝、室内プールに、私たちはいた。業平先輩は百メートル自由形だ。ピストルの音でいつせいに飛び込む。

ふと清らさんが教えてくれた、業平先輩の歌を思い出す。

『1』という名の水しぶき』今なら、どういう名をつけるだろうか。二十五メートルを過ぎて、先輩が遅れ始めた。業平先輩がどれだけ力を振りしほつても、差はちぢまらない。人間には2』だけど、限界がある。そこには勝ち負けという3』が突きつけられる。けど業平先輩はもっと違う世界へ向かつて泳いでる気がした。

たこつばの、入り口のドアを開けたとたん、いと先輩が嬉し^{うれ}そうに、自分の右隣^{となり}に綾美を招く。業平先輩と目が合った。

「うちの学校からは、たぶん、一、三人はインターハイへ行くから。そいつら見てると、水が水じゃないみたい。水つかんでるし。僕みたいにバチャバチャ暴れてないし。溺^{おぼ}れてるみたいだっただろ」

今日は、業平先輩のお疲れさん会だけど、あえて水泳の話は避けたほうがいいであろうと、勝手に変な気を回していた。その必要がないとわかった、どうしても聞きたくなかった。

「負けるとわかっていても、試合に出るって嫌^{いや}じゃないですか？」業平先輩は静かな声で私の質問に答えてくれた。

「言葉にするのは難しいけど、負けることも必要だと思ふんだよな。もちろん、もつともつとやれるヤツは、上を目指して頑張ればいいけど。負けることで、H』がわかる。それがわかるって、僕は大事だと思ってる。だって、行きたい場所があつてもH』がわからないと進みようがないだろ。ま、最初はさ、もしあのとき、事故つてなかったら……とかね。いつまで経つてもそこから抜け出せなくて。」

そんなとき難波江先生から、短歌を勧められた。そうですよ、先生」

「ああ、まあ。人間なんて、自分だけでなんとかできるような器用な生きものじゃないから。人間に必要なのは、A』出会いとB』別れが、ちゃんと共存している場所なんだ。そこでいろいろな喜怒哀楽と関わっていく。その中で、人は心を傷つけるかもしれないが、いやすこともできる」私もそうした関わりの中で人と触れ合いたい。店を出て別れ際、いと先輩が綾美を呼び止めた。

「短歌っていうのはさ、誰かがこの気持ちを必ず理解してくれるって、そう信じる心から生まれるものだから。もしよかったら、わかり合える人を一緒に探そ」

「えっ綾美……」「おはよう。学校って遠いね」

綾美が照れ笑いを浮かべた。綾美が来たとき、いろいろ言葉をかけようと考えてたはずなのに、思い出せない。私たちは教室へ入った。六月十四日。私たち、中田高校うた部の五名は、大会会場である秀麗高校に向かった。選手宣誓のあと、簡単にルール説明。

「さあ、行くよー！」いと先輩が、キリッとした声で言う。一回戦の対戦相手は重広高校だ。いと先輩と相手の名前が呼ばれたあと、「始め！」と声がかかり、デジタルタイマーが動き出した。しばらくしてすつと顔をあげ、いと先輩が席を立つ。それを待っていたかのように重広高校の男子生徒も立ちあがった。それぞれに用意された、ホワイトボードに書き込む。判定は素早かった。

「勝ち、中田高校」座ったままの姿勢で軽く黙礼する。そして私の番だ。名前を呼ばれ挨拶をする。今自分が一番表現したいことを（①）歌にすればいい。私は右隣に座る綾美の顔を見た。綾美も私を見ていた。その目を見たとき、私はふと思いついた。私がただ、綾美のことを友達として好きだったときのことを。そして今私は確信した。私はこれからずっと彼女を親友と呼ぶ。この一度きりの尊い人生の中で。伝えたい。この思いを歌にして。

私は立ち、思い浮かぶままボードへ書いた。

『美しくなくてもいいよね生きるって』

ア

「勝ち、重広高校」あっさりと負けてしまった。もちろん悔しかったけど、綾美の少しほころんだ顔を見たたん、ちゃんと届いたのだと、勝敗とは違う喜びが込みあげてきた。

「それでは、次行きます」相手選手と綾美が名前を呼ばれ、席を立ち一礼する。

「始め！」タイマーが動き出すと、綾美はもう頭の中に歌があったのか、席を立ち、中田高校側のボードへ進んだ。

『魂を（C）もの（D）もの同じ十本の指もつもの』

私の隣に書く。すごい。本当に魂がこもっている。

「勝ち、中田高校」これで二勝一敗。もし次で負けても、いと先輩なら、決勝戦できつと勝ってくれる。

「それでは連歌です。上の句か下の句に、朝という言葉を使ってください」

業平先輩は、試合が始まるとすぐに動いた。

『冬の朝喜び悲しみ愛おしさ』

そして清らさんにバトンタッチ。

『冬の朝喜び悲しみ愛おしさ』

イ

清らさんすごい。とても凛として、素敵な歌だ。

「勝ち、中田高校」と告げた。

教室を出た瞬間、「キヤーツ!!」と綾美と抱き合ってしまった。自分のことはともかく、みんなで勝てた実感。チーム力や仲間といった言葉が、自分の中で血肉になる。

「綾美、やつぱりすごいよ！」

「桃子のだって」そして綾美は一瞬黙ったあと、「桃子からのメッセージ、ちゃんと受け取った」とつぶやいた。

二回戦。相手は秀麗高校——。いと先輩と清らさんの一勝一敗で次は業平先輩だ。

「勝ち、秀麗高校」業平先輩が悔しそうな表情を見せた。

「続いて連歌です。『うた』、もしくは『うたう』を、上の句か下の句どちらかに使ってください」

私は綾美を見た。緊張しているのか綾美は手もとばかり見ている。立ちあがって礼を交わし、着席する。連歌の題が出た時点で、私は頭の中で考えていた。下の句を作る綾美に、なるべく時間をあげたくて。立ちあがってホワイトボードの前に進み出る。

『うたうとは小さないのちひろいあげ』

難波江先生がいつも言ってる。うたうとは、喜怒哀楽という「種」に、水や養分や光を与え命を育ませる。そういう意味だ。種は命。あとは綾美がこの歌に、どういう花を咲かせてくれるか。喜怒哀楽の中に埋もれてしまふのではなく、そこから育って咲く花が、きつとある。席に戻ろうとすると綾美が立ちあがった。私は綾美にマーカーを渡そうとした。その瞬間だった。

「あれ、あの娘、引きこもってたんじゃないの？」

観客からの小さな声だった。けれど、静まりかえった教室には十分に響き渡った。手渡したはずのマーカーが、落ちて転がった。綾美の手が震えていた。声をかけたかったけど、話しかけた時点で失格だ。補助員がすぐに歩み寄り、別のマーカーを渡してくれた。綾美はホワイトボードの前で、忘れた言葉を思い出そうとしているように見えた。綾美の手が動き、何か書き付けて、すぐに消してしまった。どうしたんだろう。綾美がまた何か書きかけて消した。気のせいか顔色まで悪く見えてくる。心臓の打つ音が次第に強く速くなる。

「あと一分です」

綾美は最後にもう一度、マーカーのキャップを外し、ホワイトボードに向かったけど、一瞬振り向き私を見ると、そのまま何も書くことはしなかった。

「終了！」「ありがとうございます」

くぐもった（内にこもった）声で綾美は一礼すると、私の隣に戻った。無意識に心が動いて、私は綾美の手を握った。

「ごめん。続けにくかったかな」

「そんなことはないよ。ただ……」綾美の声が消える。

「連歌部門は残念ながら、中田高校不成立ということで、秀麗高校の勝利です」

高校野球でいうと、最後のゲームが、押し出しのフォアボールで終わってしまったような不甲斐なさはあるけど、正直私はあの声に、悪意やけいりやくは感じなかった。不用意ではあるけど、見たままを友人に話しかけたのだろう。綾美を見ると、何か違うことを考えてる顔をしていた。綾美の表情が気になって声をかけた。

「私のことなら、ごめん、しばらく一人になりたい。でも大丈夫だよ」

そう言っ綾美は、駐輪場へ向かって歩いていった。その背中には「追いかけないで」とはつきり書かれていた。大会の打ち上げの集合時間には、綾美以外全員のリラックスした顔が並んでいた。部室で綾美は、行こうかどうか迷っているのだろうか。秀麗に負けたことを、自分のせいだと悔やんでいるのだろうか。

そのときだった。着信音がして、控えめな明かりの中に「綾美」と浮きあがって見えた。

「今、星見台公園に来てるの。帰ろうと思って、停留所へ行ったら、もう最終のバスが出たあどだった」

私は綾美にすぐ迎えに行くと言って電話を切った。

「さあ、みんなで行くよ。」清らさんにせかされ、私たちは転がるように階段を降りた。

難波江先生のミニバンは、飛ばし気味に自動車道を疾走した。私は綾美にすぐ電話をした。直接話したい。声を聞きたい。先輩たちも一緒に緒だと伝えると、

「ごめん。せっかくの打ち上げなのに、こんなことになっちゃって。でも、今夜は星も綺麗だから、きつとみんなも喜ぶと思うよ」

むちゃくちゃ落ち込んでたらどうしようかと心配してたから、ちよっぴりのんきな答えにホッとした。

光の輪の中で、綾美が嬉しそうに手を振っていた。制服を着たままだ。家にも帰ってなかったのか。

「何してんのよ、こんな寂しい場所です！」私は綾美のもとに駆け寄り、抱きついた。

「みなさん、本当にすみませんでした」綾美は頭をさげた。

「せっかくだし、星空を見に行きませんか」

「何言ってるの、心配させておいて」と先輩は言うけど、表情はにこやかだ。階段状になった坂道を登りきると、突然、暗闇と星空だけの空間に出た。宇宙の子どもになった気がした。星が心の内側にまで入り込んで輝く。

「桃子、私やつと見つけたんだよ」綾美が不意に言った。

「今日大会で、桃子があんなに素敵なの句を詠んでくれて……私、絶対に自分で納得できる下の句を付けたかったの。一度書きかけて、す

ぐに、あつ違うと思っちゃった。あそこから頭の中が、ぐじゃぐじゃになっちゃって。でも、適当に書くことだけはしなくなかった。先輩たちからも、いっぱいいい言葉をもらったぶん、とってつけた言葉じゃなくて、自分の言葉で下の句を続けたかった。結果、できずに負けちゃったけど。先輩ごめんなさい」

「そんなのいいよ」と先輩が言う。

「だから、駅で別れてからもずうっと歩き回って、下の句を探したんだ。夜までには絶対に探し出して、披露したかった。『うたうとは小さいのちひろいあげ』。あの上の句を、何度かくり返してるうちに、気づいたの。今まで生きてきた中で、一番幸せだったときのことを思い出してみようって。そうしたら、桃子とここでこうして、星空を見あげたときのことを思い出して、気がついたら、バスに乗ってたの」

「キャンプのときだったよね」

「ねえ、桃子、上の句をもう一度言ってみて。ようやくできたの。納得いく下の句が」

先生も先輩たちも、ずっと黙って話に耳を傾ける。綾美が私の手を握った。雲が流れて月を隠した。私は星に語りかけるように詠んだ。

「うたうとは小さいのちひろいあげ……」

「……宇宙へ返すぬくもりをそえ」

綾美の指先からそのぬくもりが、力強さと一緒に伝わってきた。私が初めからもう一度詠み始めると、綾美も声を重ねた。

『うたうとは小さいのちひろいあげ宇宙へ返すぬくもりをそえ』

綾美はなんて誠実なんだろう。そしてこの歌は二人の歌。私も誠実でありたい。つないだ手を握り返すと、綾美の言葉が、身体に流れ、溶けて、広がり、心をいやしてくれる。月がまた姿を見せた。上弦の月はまだら雲のせい、怪しげな光を放ちながら不安げに揺らめく。まるで人の心のような。

「あつ！」と、私は声を上げていた。

「どうしたの桃子？」「今、ふつと歌が浮かびました」そして詠んだ。

『ゆらゆらと雲のあいまに浮かび月』

何も失ってはいない。月に向かって、胸を張ってそう言いたかった。不安はある。けれど、たとえ強がりだと言われようと、明日という日がある限り、私も綾美も、何も失ってはいない。自分の想いを、言葉に託すことをあきらめない限り。

（村上しいこ「うたうとは小さいのちひろいあげ」より）

第一回 国語科問題

〔一〕

——線Aとありますが、短歌に必要な心の①「瞬発力」②「柔軟性」とはどのようなものですか。

①「瞬発力」は一つ、②「柔軟性」は二つ、それぞれ最もふさわしい一文を探し、はじめの五字を書きなさい。

(二)

□ 1、2にふさわしいことばを考えて言い切りの形に直し、ひらがなで書きなさい。

(三)

□ B にふさわしいことばを考えて、自分のことばで書きなさい。

(四)

-----線C、~~~~~線Eについて、あとの①、②に答えなさい。

①Cの歌にはどのような気持ちがこめられていますか。「私」の気持ちを書きなさい。

②Cの歌を詠んだ「私」が~~~~~線Eのように感じたのはなぜですか。自分のことばで書きなさい。

(五)

——線Dとありますが、これはどのような様子を表していますか。自分のことばで書きなさい。

(六)

(あ) (う)に最もふさわしいことばをそれぞれ選び、あとに続くように直して書きなさい。

さびしい やわらかい こわい きれいだ みじめだ すなおだ

(七)

——線Fとありますが、そうすることによって私は綾美に何を伝えたかったのですか。

最もふさわしい一文を探し、はじめの六字を書きなさい。

(八)

-----線Gとありますが、これと同じ「私」の姿を述べている部分をこれより前の文中から一文で探し、

はじめの六字を書きなさい。

(九)

□ 1、3に入る最もふさわしいことばをつぎのA、カから選び記号で書きなさい。

A 希望 イ 残酷 ウ 過去 エ 孤独 オ 絶望 カ 現実

(十)

□ H には同じことばが入ります。五字程度で考えて書きなさい。

(十一)

□ A 出会い □ B 別れ とありますが、業平先輩にとっての「出会い」と「別れ」とは何ですか。

最もふさわしいことばを文中から二字で探し、書きなさい。

(十二)

□ アーウには、つぎの1、3のどの下の句が入りますか。番号で書きなさい。

1 しかと見据えて自転車をごぐ

2 今日目の前の君と生きるよ

3 わたしは何をなくしましたか

(十三)

(C)、(D)に入る最もふさわしいことばを難波江先生のことばから探し、短歌を完成させなさい。

(十四)

~~~~~線Iの短歌には二人のどのような気持ちがこめられていますか。そしてこの歌から、短歌とはどのようなものだと伝わってきますか。文章全体から考えて自分のことばで書きなさい。

(十五)

——線①、④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

第一回 国語科答案用紙

○時間は五十分です。  
○答えはすべて答案用紙に書きなさい。

第一国

氏 名

番 号

得 点

〔一〕

(一)

①

②

③

④

(二)

1 われに

2 思案に

(三)

(四)

①

②

(五)

(六)

あ

い

う

(七)

(八)

(九)

1

2

3

(十)

(十一)

A

B

(十二)

ア

イ

ウ

(十三)

C

D

(十四)

(十五)

①

そうさ

②

とうろく

③

ちぢまる

④

けいりやく